

## 運動部活動における指導者の欲望論試論 ：「コーチング回路」概念の批判的検討を通して<sup>1</sup>

坂本拓弥 (筑波大学)<sup>2</sup>

### Abstract

This study re-examines the issue of “excessive coaching” in extracurricular sports activities and clarifies the causes of short of “coaching circuit,” raised by Kubo, by focusing on the coach’s desire. First, I demonstrate the significance of this concept as both recognizing the coaching process as a circuit and introducing the “philosophy” step within the circuit. Although the short of circuit implies “excessive coaching,” Kubo’s discussion simply remains a suggestion of the cause of “excessive coaching,” which would be a limitation of his theory.

In the sport philosophical literature, most researchers discussing the background of “excessive coaching” have analyzed the cause for the relationship between coach and students. Phenomenologically, however, the relationship is the inner structure of a team, and there is scope for further investigation into the external structure. This external structure of a team would indicate the other teams or coaches as competitors for the coach, because competitive sports, with competition as their essence, are played as extracurricular activities. This understanding suggests the new viewpoint of “plurality” of coaches, according to which, a coach unconsciously exaggerates her/his desire for winning for herself/himself while facing competitions with other innumerable coaches. Here, the crucial problem is that this coach’s desire for herself/himself obscures another desire, namely, letting students win a game for their human development, which is supposed to be upheld by the coach. Thus, the short of “coaching circuit” refers to the phenomenon of losing the basic and essential goal of coaching, guided by the result of a triangular desire’s boost. In this situation, the coach would regard the students either as a machine for achieving her/his desires or an obstacle in the path of realizing it, resulting in “excessive coaching,” including abusive or violent behavior.

**Keywords:** excessive coaching, plurality, competition, phenomenology, sport integrity

キーワード：行き過ぎた指導，複数性，競争，現象学，スポーツ・インテグリティ

---

<sup>1</sup> An attempt on the desire of sports coaches: Re-examination of “coaching circuit”

<sup>2</sup> Takuya SAKAMOTO, Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan

## 1. はじめに

本稿の目的は、運動部活動における〈行き過ぎた指導〉の問題を、「コーチング回路」を手がかりに捉えなおし、そのうえで、回路のショートの原因を、指導者の欲望に着目して明らかにすることである。この試みは、以下の2つの具体的な作業から成り立っている。

第1に、久保の提示した「コーチング回路」を批判的に検討し、その意義と課題を明示することを試みる。「コーチング回路」の概念は、体育・スポーツ哲学領域において、運動部活動の指導を対象とした数少ない研究の1つである。管見では、この概念を正面から取り上げた先行研究は見られず、したがって、これまで十分な検討がなされてきたとは言えない。しかし、運動部活動をはじめとするわが国のスポーツ指導の現場において、未だに数々の問題が発生している現在だからこそ、この「コーチング回路」を検討対象とし、今日におけるその適用の可能性と課題を明らかにすることには、一定の意義が認められるであろう<sup>1)</sup>。

第2に、指導者の欲望という視点から、「コーチング回路」のショートという事象、すなわち、〈行き過ぎた指導〉という事象の原因を明らかにすることを試みる。本論で詳述するように、例えば〈勝ちたい〉や〈勝たせたい〉といったように、指導者が指導において何かを意図し、その実現を望むとき、そこには必ず欲望の存在が想定される。したがって、指導者の欲望の在り方は、指導者の行為にとって決定的な意味をもつと考えられる。つまり、運動部活動の指導者がどのような欲望を有し、またそれがどのような事態を招きうるのかを検討することは、これまで論及されてこなかった指導者の在り方を新たに浮かび上がらせるためにも、不可欠の作業になると考えることができる。

以上の2つの作業から、「コーチング回路」のショートとしての〈行き過ぎた指導〉の原因

とその実像を示すことを通して、運動部活動における指導者の欲望論を素描することが、本稿のねらいである。

## 2. 〈行き過ぎた指導〉論の射程

運動部活動をはじめとするわが国のスポーツ指導に目を向けてみると、そこには、相変わらず多くの問題が山積している。もちろん、指導者による暴力行為はその筆頭である。しかし、ショッキングな暴力行為に目を奪われがちではあるものの、それと同時に、指導者の暴言や威圧的な振る舞いも依然として大きな問題として存在している。場合によっては、むしろ暴言などのほうが多いと言えるかもしれない<sup>2)</sup>。

本稿は、このような問題意識に基づいて、これまで様々な論じられてきた指導者の指導にかかわる問題を、〈行き過ぎた指導〉として包括的に捉えることを試みる。このような試みに対しては、包括的に捉えることでむしろ細部を捉えられなくなるという批判があるかもしれない。しかし、一方では、その細部にかかわる、特に体罰と呼ばれる暴力行為にかかわる議論が蓄積されてきた影で、運動部活動における指導者の暴言や常軌を逸した振る舞いは、むしろ不問に付されてしまっている現実があるのではないだろうか<sup>3)</sup>。相変わらず運動部活動の現場で目にするように、生徒の人格を否定するような暴言の数々は、決して許容されるべきものではない。それゆえ、そのような問題の解決に向けてわれわれに求められていることの1つは、暴言などの指導者にかかわる問題が、物理的な暴力と共通する要因から発生している可能性を検討し、その共通する背景を明らかにすることではないだろうか。本稿はそのために、〈行き過ぎた指導〉という包括的な概念を便宜的に用いていくこととする。

また、〈行き過ぎた指導〉とは、一体何について行き過ぎているのかという点について、本

稿では、ひとまず学校教育という営みの範疇から逸脱している、という暫定的な規定にとどめておきたい。そのため、個別の事象について線引きをするような議論はできないものの、運動部活動の現場において、学校教育の枠を明らかに逸脱している、すなわち〈行き過ぎている〉と思われる事象を念頭に検討を進めていきたい。もちろん、学校教育という営みの枠組みそのものも検討されるべき課題ではある。しかし、周知のようにわが国の運動部活動は、制度的にもまた実質的にも、長期間にわたって学校教育の一環として位置づけられており、諸外国と比べても特殊な在り方をしている<sup>4)</sup>。したがって、運動部活動における〈行き過ぎた指導〉を、学校教育という枠組みを前提に論じることには、一定の妥当性が認められるであろう。

付言すれば、運動部活動の指導者にかかわる問題を〈行き過ぎた指導〉として包括的に捉えることは、わが国におけるスポーツ・インテグリティについての議論にも寄与すると考えられる。なぜなら、スポーツ・インテグリティを脅かす要因もまた、決して物理的な暴力だけではなく、むしろ多様な問題として現出しているからである。そのため、問題の包括的な理解は、スポーツ・インテグリティを守り、さらにはそれを創造していくための議論に、新たな視点を与えうるであろう。

### 3. 「コーチング回路」概念の批判的検討

#### 3.1 「コーチング回路」の概要

運動部活動における〈行き過ぎた指導〉について検討するために、本稿ではその手がかりとして、「コーチング回路」概念に着目する。「コーチング回路」は、久保が提示した、運動部活動の指導実践の理念型である。先にも述べたように、これは体育・スポーツ哲学領域において、運動部活動の指導を論じた希少な研究であるが、これまで十分に検討されてきてはいな

い。したがって、ここではまず、この「コーチング回路」の概要を確認したい。

久保は、複数のマネジメント概念を批判的に検討し、そのうえで、アドミニストレーションの概念を論じた Hodgkinson, C. の議論から、運動部活動の指導プロセスのモデルを「コーチング回路」として提示している。それは、「哲学」、「計画」、「組織化」、「経営」、「評価」の順に進み、そこから「哲学」に戻り、再び「計画」へ進むというように、指導実践の一連の働きかけを、各段階が途切れることなく接続されたもの、すなわち、1つの「循環回路」<sup>5)</sup>として示したものである(図1)。これについて、久保の議論を追ってみたい。



図1 コーチング回路<sup>6)</sup>

久保はまず、この回路が「試合の勝利追求という機能を有する回路である」<sup>7)</sup>と述べる。つまり、運動部活動が競技スポーツを対象とするがゆえに、この回路は試合において勝利を求めることを大前提としているのである。翻って言えば、勝利追求を求めない指導の在り方は、ここでは除外されている<sup>8)</sup>。

そのうえで、久保は、「『計画』 - 『組織化』 - 『経営』」の段階は、試合の勝利追求に対する効率と効果を求めるのであり、それらの段階自体には、『勝利追求』をプログラムの価値の観点からチェックする装置はない<sup>9)</sup>と述べる。

確かに、明日の練習で或るメニューをやらうと  
考え、それを構成し、実際に生徒に指導する際、  
それらの段階で〈そもそも何のために指導して  
いるのか〉と考える指導者は多くないであろう。

さらに、それらに続く「評価」の段階につ  
いて、久保は次のように指摘する。すなわち、  
『「評価」の段階は、それに先立つ『組織化』－  
『経営』の段階における結果を『計画』に対す  
る効率と効果の観点から集計する』<sup>10)</sup>ものであ  
る。つまり、設定された「計画」がどの程度達  
成されたかを「評価」するのがこの段階であり、  
そしてその「評価」は、『「哲学」の段階へとフィ  
ードバックされる』<sup>11)</sup>ことになる。以下に見るよ  
うに、久保が多くのマネジメント概念の批判的  
検討を通して導き出した視点が、この「哲学」  
の段階である<sup>12)</sup>。

「コーチング回路」の最も特徴的かつ重要な  
段階である「哲学」について、久保は次のよう  
に論じている。

「哲学」の段階は判断機能を有する。つまり、  
「勝利追求」をプログラムの価値の観点から  
チェックする装置である。この「哲学」の段  
階において、「勝利追求」の意図、すなわち「計  
画」される目標そのものの意図（価値）を論  
じることによって、その「回路」を流れるも  
の[の]「質」を変えることができ、また、そ  
の回路を再構成し得る可能性を持っている<sup>13)</sup>。  
(角括弧内引用者)

このように「哲学」から「評価」までの「各  
領域から成る『コーチング回路』を作動させ、  
さらに再構成していく過程が『コーチング実践』  
である」<sup>14)</sup>と久保は述べる。彼はこのようにし  
て、運動部活動における指導実践の理念型を、  
「コーチング回路」として示している。では、  
この「コーチング回路」という概念は、〈行き  
過ぎた指導〉の問題を検討する際に、どのよう  
な意義と課題を有しているのだろうか。

### 3.2 今日の意義と課題

先に指摘したように、この概念の最も特徴  
的かつ重要な点は、指導のプロセスに「哲学」  
の段階を取り入れていることにある。すでに確  
認したように、運動部活動における自身の指導  
実践をこの「コーチング回路」に基づいて、特  
に「哲学」の段階において振り返ることができ  
るということは、指導のそもそもの目的を問い  
返す視点を指導者が常に有しているということ  
を意味している。つまり、〈そもそも何のため  
に指導しているのか〉という、日常のなかでは  
忘れられがちな基本的かつ根本的な問いを繰り  
返し問うことの重要性を、久保の議論はわれわ  
れに示しているのである。

この「哲学」の段階の重要性を、彼は、『「哲  
学」の段階において、『計画』される目標その  
ものの意図（価値）を論じることによって、進  
む方向を変え得る可能性を持っている』<sup>15)</sup>と指  
摘している。つまり、指導が上手くゆかず行き  
詰まった際に、指導の方針を固持したまま、そ  
の不安やイライラを生徒に向けるのではなく、  
また単に技術的な解決を求めめるだけでなく、  
むしろ、そもそもの自身の指導の目的が何で  
あったのかを再考するために、「哲学」の段階  
は存在しているのである<sup>16)</sup>。確かに、指導がス  
ムーズに進んでいるときに暴言や暴力が発生す  
るとは考えにくい点を顧みると、この「哲学」  
の段階は、〈行き過ぎた指導〉に対する1つの  
ブレーキの役割を担う可能性を有していると言  
える。逆説的に言えば、指導者が生徒に暴言や  
暴力を浴びせているその瞬間に、その指導者が  
〈そもそも何のために指導しているのか〉とい  
う問いを自身に向けているとは考えられないこ  
とも、この可能性を暗に示しているであろう。

さらに、この「コーチング回路」の概念は、  
指導の理想的なモデルだけでなく、むしろその  
逸脱した状態について、独自の解釈を可能にし  
ている点に、〈行き過ぎた指導〉を捉えるため  
の意義を指摘することができる。これについて

久保は、この回路から「哲学」の段階が抜け落ちた指導の在り方を、次のように論じている。

「評価」の段階からのフィードバックが「ショート」し「計画」の段階へと直結した場合は、「コーチング回路」は「閉じられた回路」となり、「計画」された「勝利追求」をめぐる「コーチング回路」は暴走する<sup>17)</sup>。

ここで指摘されているように、「哲学」が抜け落ち、ショートした指導は、純粋に勝利追求のみを目指して暴走を始める。なぜなら、「『哲学』の段階のないプロセスでは、設定された目標に向かって如何に効率よく到達するかが『計画』され、それが実行されるのみ<sup>18)</sup>になってしまうからである<sup>19)</sup>。久保はそれを「閉じられた回路」(図2)と呼び、そのショートによって、様々な問題が発生しうることを指摘している。



図2 閉じられた回路<sup>20)</sup>

この回路の暴走の例について、久保は、試合の勝利という目標が「『コーチ』自身の個人的な欲求充足や地位の向上のために『計画』されるかもしれない<sup>21)</sup>」と指摘している。また、より具体的な問題として、彼は次のような例を挙げている。すなわち、「『選手の道具化』『ドーピングの示唆』『意図的なルール違反』、あるいは勝利至上主義と称される問題など、『コーチ

ング』における現実の諸問題は、この『計画』の意味を問う段階の欠落に起因している<sup>22)</sup>と考えることができるというのである。

このように指摘されている事柄を本稿の文脈に即して捉えるならば、それらは総じて〈行き過ぎた指導〉の具体例として理解することができるであろう。そして、このことから示唆されるように、運動部活動が学校教育の一環としてその教育的意図を実現するためには、「コーチング回路」における「哲学」の段階は不可欠である。もちろん、その意図自体は、個別の状況に合わせて多様でありうる<sup>23)</sup>。しかし、いずれにしても、その意図を見失ったこのショートと呼ばれる状態が、〈行き過ぎた指導〉を指していることは、明らかであるように思われる。つまり、そもそも学校教育の一環として、生徒の成長を促すために営まれていた運動部活動が、いつからか暴言や暴力の飛び交う空間に変容してしまったのであれば、それはこの回路がショートし、暴走を始めたからだと考えることができるであろう<sup>24)</sup>。

以上の検討から明らかなように、久保の提示した「コーチング回路」の概念は、運動部活動における〈行き過ぎた指導〉に対する1つのブレーキになる可能性を有するとともに、その逸脱した在り方を回路のショートとして理解する視点をわれわれに与えるものである。この点において、彼の議論は今日の運動部活動を取り巻く現状においても、一定の意義を有していると考えられる<sup>25)</sup>。

しかし、そもそもなぜ「コーチング回路」のショートは発生するのであるのか。久保はこのショートの原因について、以下のように、その環境的な要因を指摘するにとどまっている。彼は、運動部活動が学校教育の一環として「教育的空間」であると同時に、「競技的空間」でもあることを「二重空間」として指摘し、そこから生じうる問題を次のように論じている<sup>26)</sup>。すなわち、「ここでは『教育プログラム』の中

に組み込まれたはずの『コーチング回路』が、『競技的空間』からの勝利への強い『ノイズ』によって、あたかも『競技力向上プログラム』の中に組み込まれたかのように変質してしまう<sup>27)</sup>というのである。

このように、久保は回路になぞらえて、ショートの原因をノイズと呼んでいる。しかし、その内実が一体何であるのか、また、そのノイズがなぜ生じるのかについて、彼はその詳細を論じていない。特に、『競技的空間』からの勝利への強い『ノイズ』が、一体何を意味しているのかについては不明のままである。したがって、〈行き過ぎた指導〉の原因を解明する試みにおいては、この点に残された課題を指摘することができる。すなわち、この久保の議論をさらに先に進めていくためにも、「コーチング回路」のショートがどのように起きうるのかを明らかにすることが、われわれの探求すべき課題となるであろう。

#### 4. 指導者の〈複数性〉と欲望

##### 4.1 従来の〈行き過ぎた指導〉論に対する現象学的批判

〈行き過ぎた指導〉、すなわち、「コーチング回路」がショートするという事象の原因を探るために、ここでは、従来の〈行き過ぎた指導〉に関する議論の論点を確認してみたい。それを検討することによって、〈行き過ぎた指導〉の原因がこれまでどのように捉えられてきたのかを明らかにし、従来の議論の限界を見定めていきたい。

体育・スポーツ哲学領域において議論されてきた〈行き過ぎた指導〉論の論点を端的にまとめると、これまでその多くが、生徒との関係性を問題にしてきたことがわかる。もちろん、そのことには必然性がある。例えば内山は、運動部活動以外も含めたスポーツコーチの本質について、「勝利に向かって競技者の『身体全体

の向け変え』を外発的に力づくで強制する、つまり、『鉛の錘のようなもの』による拘束から競技者を常に解き放ち、『強制力』を勝利のために行使することである<sup>28)</sup>と論じている。ここからも読み取ることができるように、指導者は競技者、すなわち運動部活動においては生徒に働きかける存在なのである<sup>29)</sup>。つまり、運動部においては、生徒の存在なしに指導者は存在しえないということである。

このように、指導者と生徒はそのどちらが欠けても運動部自体が存立しえなくなるという意味において、相互に不可欠の存在である。だからこそ、そこに生まれる様々な人間関係が、これまで多様に論じられてきたのであろう。例えば、運動部活動における体罰と呼ばれる暴力行為に限っても、それにかかわる指導者と生徒の関係性は、権力的<sup>30)</sup>、模倣的<sup>31)</sup>、実存的<sup>32)</sup>、服従的<sup>33)</sup>、超越的<sup>34)</sup>というように、実に様々な視点から論じられている。しかし、そのいずれにおいても確認されるように、それらの考察の枠組みには、1つの問題点を共通して指摘することができる。

これまで、指導者と生徒の関係性が論じられる際、その考察対象としては、抽象化された指導者と生徒が暗黙裡に想定されてきた。この想定は、そこから導き出される事柄を一般化するための手続きとして、妥当性を有すると思われる。しかしそこには、同時に留意すべき点もある。従来の指導者と生徒の関係性に注目した考察の枠組みは、現象学的に言えば、運動部の内部地平の構造を検討してきたということであろう。つまり、運動部という事象を成り立たせている内部の構造を、指導者と生徒の関係性として捉え、その在り方を論究してきたのである。この試みは、先にも述べたようにその関係が運動部の存立に不可欠であることから首肯される。そして、その成果は、上述の様々な人間関係を浮き彫りにしてきたのである。

しかし、このことは同時に、次のことをわ

れわれに要求する。すなわち、運動部という事象を十全に把握するためには、内部地平と併せてその外部地平もまた検討されなければならないことを意味するのである<sup>35)</sup>。外部地平とは、例えばコップという事象の場合、そのコップが置かれているテーブルのことを示している。つまり、或る事象を成立させている背景と言うことができる<sup>36)</sup>。したがって、それは抽象化された或る運動部を成立させている外部＝背景に目を向けるということである。そして、その外部地平として浮かび上がってくるのが、他の運動部の存在であり、そこにおける他の指導者の存在である<sup>37)</sup>。

この現象学的な視点は、次のことを明らかにする。すなわち、〈行き過ぎた指導〉についての従来の議論において、抽象化された運動部における指導者と生徒の関係は、単一のものとして見紛われ、その結果、運動部が他の多くの運動部とともに存在しているということ、そして、そこにおける指導者もまた他の多くの指導者とともに存在しているという基本的な条件が忘れられてきたのである。この点が、本稿が提起する指導者の〈複数性〉という論点である<sup>38)</sup>。

この指導者の〈複数性〉という基本的な条件は、あまりにも当たり前であるがゆえに、これまで十分に注意が向けられてこなかったのではないだろうか。この基本的な条件の意味とその重要性は、次の思考実験によって浮き彫りになるであろう。すなわち、仮に運動部がこの世界に1チームしか存在しなければ、そこに他のチームとの競争が生じることはない。そして、そのような状況において、暴力や暴言のような〈行き過ぎた指導〉は起こりえないと考えられる。これについてSakamotoは、「競争する相手やライバルが存在しなければ、勝利への執念も、ゲームへの熱狂も、そしてその逸脱としての暴力も、等しく成立することはない」<sup>39)</sup>と述べ、競技スポーツにおける競争と暴力性との密接なつながりを指摘している。このことは、従

来の〈行き過ぎた指導〉論の課題を浮き彫りにする。その課題とは、運動部の内部地平の構造、すなわち、指導者と生徒の関係性に暴力等の問題の原因を求めることの限界である。つまり、従来の議論は運動部の外部地平を見逃してきたのである。そして、ここから示されるように、指導者は、他の複数の指導者との関係、特に競争という関係のなかで、〈行き過ぎた指導〉に陥っていくことが想定されるのである。

また、以上の議論からは、加えて次のことも示唆される。運動部活動における指導者は、単一で存在することはありえないのであり、そこには必ず他の指導者が存在している。ここで指摘される他の指導者とは、指導者自身がかつて指導を受けた指導者や、いわゆる指導者仲間のことである。そして、それらの指導者は実際に、様々な影響を互いに与え合っている。つまり、運動部活動における指導者は、自覚的か無自覚的かを問わず、これら他の指導者をモデルとすることで、自らの指導を、さらには自らをも形成していると考えられるであろう<sup>40)</sup>。指導者の〈複数性〉という視点は、このような指導者間の関係性をも、新たな議論の対象としていくことを可能にするのである。

#### 4.2 〈勝たせたい〉という欲望の裏側

この指導者の〈複数性〉という論点を踏まえると、運動部活動の指導者がかかわる競争そのものを検討する必要があることがわかる。つまりそれは、指導者が何によって競争しているのかを明らかにすることである。改めて言うまでもなく、指導者は競技スポーツにおいて、実際にプレーすることはできない。したがって指導者は、まさに指導するという行為を競っていると考えられる。換言すれば、運動部活動における指導者は、生徒を指導することを競っているわけである。そしてそれは、少なくとも競技スポーツを行っている以上、試合やゲームにおいて生徒を〈勝たせる〉ことについて、他の指

導者と競争していることを意味するであろう。

このことは、例えば次のことから明らかであろう。すなわち、そもそもなぜ指導者は、生徒たちを〈勝たせたい〉と思うのだろうか。もちろん、一般的に考えれば、それは生徒の成長を様々な側面から促すためであろう。これについては久保も、運動部活動の「指導（「コーチング実践」）は本来、『子どもたちの成長はよいものである』という『哲学』に基づいて、（その成長に役に立つ）勝利の追求が『計画』されるものである<sup>41)</sup>と述べている。しかし、そこには同時に、不可欠の前提があることも忘れてはならないであろう。すなわち、それは競争相手が存在しているということ、換言すれば、指導者の〈複数性〉の存在である。つまり、この〈複数性〉という論点を踏まえたとき、競争相手となる他の運動部や指導者が存在しなければ、〈勝たせたい〉という思い自体も生じることはないということが、はじめてわかるのである。そして、この思いこそが、指導者の欲望の別名である。ここに、〈行き過ぎた指導〉にかかわる指導者の欲望の問題が浮かび上がってくる。

競争関係にある人間の欲望について、ジラールはその暴力的な性格を論じている。彼の欲望論は、今日の体育・スポーツ哲学領域において、スポーツの本質的特徴としての競争と、それに深くかかわる暴力性の問題を捉える方法論的な視点として、その可能性が指摘されている<sup>42)</sup>。それゆえ、本稿もその立場を共有し、彼の欲望論の視点から、運動部活動における指導者の欲望の在り方を描き出し、「コーチング回路」のショートの原因を明らかにしていきたい。

ジラールによれば、われわれの欲望は主体から対象に直線的に向けられているものではなく、むしろ、他者＝媒体の欲望の模倣として存在している。要するに、私が〈勝たせたい〉と思うのは、同じく勝利を欲している他者の欲望を模倣しているからなのである<sup>43)</sup>。彼はそのよう

な欲望の在り方を、「三角形的欲望」<sup>44)</sup>と呼んでいる。このように欲望の模倣的な性格を示した点が、ジラールの欲望論の第1の特徴である。

この三角形的欲望は、他者＝媒体との精神的な距離によって、当該の人間関係に大きな影響を与える。すなわち、その距離が遠いときには、主体の媒体に対する感情は憧れや尊敬となる一方で、その距離が近くなればなるほど、その媒体は嫉妬や憎悪の対象となり、主体にとっては欲望の達成を阻害する敵とみなされるようになる<sup>45)</sup>。

この三角形的欲望論の視点からは、指導者の欲望が模倣的であるがゆえに、その欲望は他の多くの指導者と、相互的かつ半永久的に連鎖していくことがわかる。先に指摘したように、運動部活動の指導者は、精神的にも地理的にも、周囲に多くの指導者がいる状況を生きている。そのようななかで三角形的欲望が連鎖していく働きを、ジラールは「形而上的効力」<sup>46)</sup>と呼ぶ。この効力について坂本は、「競技スポーツの場における三角形的欲望は、アスリートのみにかかわるものではなく、さらに広くコーチやトレーナー、ドクターといったアスリートにかかわる人々にも同様の影響を与えている」<sup>47)</sup>と指摘している。つまり、〈勝たせたい〉という欲望は、生徒だけでなく指導者にも共有され、さらには指導者同士の間でも広まっていくのである。

ジラールによれば、この形而上的効力によって、欲望の主体は無自覚のうちに無際限な競争に巻き込まれ、三角形的欲望を過度に強めていく。そのような事態を、彼は「相互媒介の地獄」<sup>48)</sup>と呼んでいる。そのような欲望の過度の強まりは、欲望の主体に深刻な影響を与えるとされる。すなわち、その主体の「現実感覚は失われ、判断力は麻痺する」<sup>49)</sup>ことになるのである。そしてその結果、主体は欲望の本来の目的と手段を混同していくとされる。これが、ジラールの欲望論の第2の特徴である。

欲望の本来の目的と手段が転倒するこの判断

力の麻痺は、運動部活動の指導者にとって、「コーチング回路」のショートとまさに等しい状態を指している。つまり、指導をはじめた当初有していた、本来の欲望の目的であった生徒を〈勝たせること〉は、いつのまにか指導者自身が〈勝つこと〉の「手段」<sup>50)</sup>へとすり替えられてしまうということである。そのような欲望の変貌は、指導者そのものの変貌と同義である。すなわち、指導者は運動部活動という世界に入り、そこで生きていくなかで、無自覚のうちに自身の三角形的欲望を過度に強め、その結果、生徒を成長させたいという当初の志とも呼びうる欲望を、いつの間にか失ってしまうのである。それは、久保の言葉を借りて「コーチング回路」に即して表現すれば、まさに「『哲学』の喪失」<sup>51)</sup>である。

そのような指導者の欲望の過度の強まりと、それによって引き起こされる判断力の麻痺は、次のことを導くであろう。すなわち、生徒は指導者の欲望を実現するための道具になり、そのなかでも指示通りに動けない生徒は、もはや指導者の欲望の実現を妨げる障害物と化すこととなる。このような状態に至って、指導者は生徒に、暴力や暴言を向けるようになることを考えることができる。

さらに、このような三角形的欲望の連鎖する効力には、目的と手段の転倒を欲望の主体に自覚させない特徴がある。このことについて坂本は、「重要なのは、欲望の主体にはこの対象と手段の逆転が必ずしも自覚されていないということである」<sup>52)</sup>と指摘している。この視点は、運動部活動の指導者が、暴言や暴力の言い訳として、選手のためを思ってやったと語ることの実像をわれわれに示している<sup>53)</sup>。すなわち、指導者自身は生徒を〈勝たせたい〉がために暴言や暴力を用いていると認識しているものの、実際はその〈勝たせたい〉という欲望の裏側では、すでに〈勝たせたい〉という欲望が過度に強まっているのであり、そのことは指導者自身に自覚

されていないのである。したがって、「コーチング回路」のショートもまた、指導者の無自覚のうちに起きてしまっている可能性が示唆されるであろう。

要するに、このような状態にある指導者は、先に指摘したように、〈そもそも何のために指導しているのか〉という問い、換言すれば、〈何のために〈勝たせたい〉のか〉という問いを、自らに向けることができなくなっていると言える。それは言うまでもなく、「コーチング回路」において「哲学」の段階が抜け落ちてしまったショートの状態である。久保が指摘していたように、この「哲学」の段階が抜け落ちた状態では、指導者が自らの指導の意図（価値）を再考する機会を失い、したがってその欲望は、無自覚のうちに暴走することになるのである。

## 5. まとめと今後の課題

ここまでの考察から導かれるように、運動部活動の指導者は他の多くの指導者との競争のただなかで、自身の勝利への欲望を無自覚のうちに強めている。その強まりが無自覚的であるがゆえに、生徒を〈勝たせたい〉という本来有していたはずの欲望が、いつのまにか〈勝ちたい〉に覆い尽くされていることに、指導者は気づくことができないのである。したがって、そのような指導者の〈勝ちたい〉という欲望の過度の強まりが、「コーチング回路」のショートの原因であると考えられる。そして、そのような欲望の強まりによって引き起こされた〈勝たせたい〉から〈勝ちたい〉への変貌、すなわち、指導の本来の目的と手段の転倒こそが、ショートの内実であると言えよう。そのような指導者の欲望の強まりは、従来論じられてきたように必ずしも生徒との関係性からのみ生じるわけではなく、むしろ、指導者の〈複数性〉において三角形的欲望が無際限に強められることなのである。

このような指導者の欲望の在り方を暗に支え促している指導者の〈複数性〉は、体育・スポーツ哲学領域において、さらにはより広くスポーツ指導の問題についての議論においても、これまで省みられることのなかった論点である。この論点は、運動部活動を含むスポーツ指導者の養成段階において、指導者を目指す者が学ぶべき事柄の1つとして捉えられるであろう。特に、〈複数性〉が運動部活動において指導者が存立する前提条件である以上、それは自覚的に学ばれる必要があると言える。なお、この養成段階については、指導者の欲望の変容可能性、言い方を変えれば、その教育可能性についても、今後検討の余地があることを指摘しておきたい。

また、本稿の議論全体から理解されるように、久保が約20年前に提示した「コーチング回路」という概念は、これまで十分な検討に付されてこなかったものの、その意義を今日においても十分に有していると言える。特に、それは「哲学」の段階を有した回路という見方によって、運動部活動において〈そもそも何のために指導しているのか〉を、指導者自身が日常的に問い返す重要性を示すものであった。このシンプルかつ強力な視点は、改めて、運動部活動をはじめとするわが国のスポーツ指導全般に対して、指導プロセスにおける「哲学」の重要性を示すものであると言えよう。

もちろん、「コーチング回路」自体は、今後修正を加えられ、改善されていく必要があることも確かであろう。特に、最も重要な「哲学」の段階については、その内容の吟味と充実のために必要とされる事柄が数多くあるように思われる。例えば、「哲学」の段階にどのような価値観をもって臨むことが必要なのか、また、それを決定する方向性はどのように考えられうるのか。これらはともに、今日求められるスポーツ・インテグリティを創造していく作業となるであろう。そして、これらの問いを探求するこ

とは、「コーチング回路」がある種の普遍的な意義を保持しつつ、同時に今日の現実的な課題に対する有効性を獲得するために、不可欠の課題であると言える。その意味において、この「コーチング回路」の今日的意義と課題を示した本稿の試みは、今後の議論の可能性を拓くものであると信じたい。

#### 注および引用・参考文献

- 1) なお、久保がこの「コーチング回路」を論じたのは、1998年に発行された『コーチング論序説：運動部活動における「指導」概念の研究』のもととなる、彼が1996年に筑波大学に提出した博士学位論文『運動部活動における「指導」概念の研究』においてである。体育・スポーツ哲学領域において、運動部活動を対象に論じた研究は数多くあるものの、学位論文として学術的にまとめられたものは、管見では見当たらない。その意味においても、本領域において「コーチング回路」の概念を検討対象とし、それを批判的に乗り越える試みには、学術的な意義が認められるであろう。
- 2) この点に関連して、高峰らは高等学校の部活動を対象に、あえて「体罰」という語は用いずに「暴力」と「暴言」等を区別し、それらの経験について調査している。その結果の1つとして、指導者からの「暴言」が「暴力」よりも多いことが示されている。高峰修・武長理栄・海老原修(2016) 高校運動部活動において指導者や上級生から受ける暴力・暴言経験のリスク分析。体育学研究, 61(2), 755-771.
- 3) このことについて鳥沢は、次のように指摘している。「各競技において『体罰NG』の意識は共有されつつあるが、体罰発覚で処分される教員は後を絶たず、中高の強豪校や少年団における指導暴力の噂は尽きない。そのうえ新たな問題として、『手で叩

- けないから口で殴る』言葉の暴力や理不尽な指導が増幅している。」島沢優子（2016）体罰事件の深層。日本体育学会大会予稿集，67，p.14.；また，このような視点の意義について，林は，「スポーツや部活動での暴力や体罰が大きな問題になっているが，選手や子どもたちへの物理的な力だけにだけ問題を限るのは適切ではない」と指摘している。林洋輔（2013）スポーツ指導：「言葉の暴力」なくす工夫を。朝日新聞3月2日朝刊，p.17.
- 4) 学校教育と運動部活動との日本独自の結びつきについては，次の文献を参照されたい。中澤篤史（2014）運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか。青弓社。
- 5) 久保正秋（1998）コーチング論序説：運動部活動における「指導」概念の研究。不昧堂。p.122.
- 6) 同上書。p.122.
- 7) 同上書。p.122.
- 8) この前提は，競技スポーツを主たる対象とする運動部活動の現実を捉えるために，重要な意味を有している。なぜなら，競技スポーツの本質としての競争性を考慮せずに運動部活動の教育性等を論じることは，議論の前提を取り違えていることになるからである。つまり，この前提を踏まえない議論においては，運動部活動における様々な問題の原因を，競技スポーツの本質である競争そのものに求めかねないのである。川谷も指摘しているように，もしその競争性が否定されるならば，そもそも運動部活動において競技スポーツを実践すること自体が否定されることになり，それはもはや，運動部活動の現実世界を捉えることができていないことと同義であろう。なお，これについての川谷の議論については，以下を参照されたい。川谷茂樹（2005）スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版。pp.175-177.
- 9) 久保正秋（1998）p.122.
- 10) 同上書。p.122.
- 11) 同上書。p.122.
- 12) なお，久保によれば，この「哲学」の段階はHodgkinson, C.のマネジメントモデルを参照したものであり，それを「回路」として構成したことが，久保独自の議論である。久保正秋（2010）体育・スポーツの哲学的見方。東海大学出版会。pp.260-261.
- 13) 久保正秋（1998）p.122.
- 14) 同上書。p.123.
- 15) 同上書。pp.120-121.
- 16) なお，久保自身はこの観点から，そもそも競技スポーツを学校教育のなかに取り入れることそれ自体を再考する必要性を指摘している。この点に，本稿と久保の主張との前提の相違を指摘することができる。確かに，そもそも学校教育に競技スポーツという文化が適しているのか否かは，1つの重要な検討課題となりうる。しかし，〈行き過ぎた指導〉の原因を探る本稿の試みにとっては，あくまでも競技スポーツを対象とする運動部活動において，それを検討することの意義を強調したい。なぜなら，現実の運動部活動においては，批判の対象となる問題とともに，その多様な教育的意義が認められていることもまた確かだからである。この場合，久保の指摘した地点まで遡ることは，むしろ運動部活動の現実を捉え損ねる可能性さえあると言える。そのため，本稿はあくまでも，運動部活動と競技スポーツとのかかわりにおいて，指導者の在り方を検討していきたい。なお，久保の主張については，特に以下を参照されたい。同上書。pp.282-283.
- 17) 同上書。pp.122-123.
- 18) 同上書。p.126.
- 19) もちろん，それがすぐさま暴言や暴力に結

び付くわけではない。しかし、ここにはもう1つ別の論点がある。すなわち、純粋な勝利追求は、学校教育の一環としての運動部活動とどのように折り合いをつけるべきなのかという問題である。この問い自体が1つの重要な論点であるため、これについての慎重な検討は、別稿を期したい。

- <sup>20)</sup> 久保正秋 (1998) p.123.
- <sup>21)</sup> 同上書. p.119.
- <sup>22)</sup> 同上書. p.119.
- <sup>23)</sup> ただし、この「哲学」の段階に、非教育的な意図、すなわち、久保が指摘したような地位向上等の指導者の個人的な欲求充足が含まれる可能性は否定できない。この点については、そのような悪い「哲学」とショートとの差異に関する議論が今後必要になるであろう。
- <sup>24)</sup> 久保もこれについて、「『哲学』の段階における意図を喪失することによって、手段が目的へと変貌し、ひとつの『計画』に過ぎなかった『勝利の追求』それ自体が目的となってしまうということが起きる」と述べている。久保正秋 (2010) p.262.
- <sup>25)</sup> 付言すれば、この「コーチング回路」は、一般的に広く認知されているPDCAサイクルとも異なっている。すなわち、いわゆるPlan - Do - Check - Actといった一連の流れにおいても、その上位に「哲学」の段階が必要であることが理解されるであろう。
- <sup>26)</sup> 久保正秋 (2010) p.263.
- <sup>27)</sup> 同上書. p.263.
- <sup>28)</sup> 内山治樹 (2013) コーチの本質. 体育学研究, 58 (2), 691.
- <sup>29)</sup> これについては久保も、運動部活動における指導概念を論究する前提として、「本書では『コーチング実践』を、人間による人間に対する働きかけを意味する概念として捉えようとしている」と述べている。もちろん、この人間とは、運動部においては指

導者と生徒を意味するであろう。久保正秋 (1998) p.125.

- <sup>30)</sup> 舩本直文 (2001) 第14章学校運動部論:「部活」はどのような身体文化を再生産してきた文化装置なのか. 杉本厚夫編. 体育教育を学ぶ人のために. 世界思想社. pp.262-280.
- <sup>31)</sup> 坂本拓弥 (2011) 運動部活動における身体性: 体罰の継続性に着目して. 体育・スポーツ哲学研究, 33 (2), 63-73. ; 坂本拓弥 (2013) 「体育教師らしさ」を担う身体文化の形成過程: 体育教師の身体論序説. 体育学研究, 58 (2), 505-521.
- <sup>32)</sup> 松田太希 (2015) スポーツ集団における体罰温存の心的メカニズム: S.フロイトの集団心理学への着目から. 体育・スポーツ哲学研究, 37 (2), 85-98. ; 松田太希 (2016) 運動部活動における体罰の意味論. 体育学研究, 61 (2), 407-420.
- <sup>33)</sup> 大峰光博 (2016) 運動部活動における生徒の体罰受容の問題性: エーリッヒ・フロムの権威論を手掛かりとして. 体育学研究, 61 (2), 629-637.
- <sup>34)</sup> 高尾尚平 (2017) 超越へ向けた暴力: スポーツの指導と暴力の交点. 体育・スポーツ哲学研究, 40 (1), 35-52.
- <sup>35)</sup> 外部地平に目を向ける重要性について、ザハヴィは、「対象そのものは、ずっと広範囲の地平の中に位置づけられる」と指摘している。ザハヴィ, D. (工藤和男・中村拓也訳) (2017) 新装版フッサールの現象学. 晃洋書房. p.147.
- <sup>36)</sup> この外部地平の背景的意味について、小川は次のように述べている。「一枚の紙は机の上であり、机は、部屋の中に見いだされ、その部屋は一軒の家屋の中にあり、家屋は、通りに面している。関連づける観察の遂行のなかで、それぞれ独立の基体として見いだされるものが一定の統一的連関のもとに置かれる。」小川侃 (1994) 地平. 木田元

- ほか編. 現象学事典. 弘文堂. p.325.
- 37) もちろん, 考察する側がどのようなレベルの視点を設定するかによって, この外部地平は多様にありうる. 例えば, 1校の学校という枠組みで考えると, 他種目の運動部との関係を問うことも可能であるし, また他方で, 同一種目を行っている他校の運動部との関係を対象とすることもできる. 本稿が想定しているのは, この後者である.
- 38) 運動部という事象に対するこのような見方は, 以下の小川の指摘からもわかるように, 現象学的にも支持されうるものだろう. すなわち, 「ある現れている対象とおなじ根源的な直観性のもとに, その対象と共現在のかつ対象的な周界が見いだされる. この周界はつねに『背景的に』かつ『ともに同時に触発している基体の数多性』としてともに与えられている. この周界の内にあらかじめ現れているものは, 多くの触発し自らを際立たせるものの統一である. この周界は外部地平と呼ばれる.」小川侃 (1994) p.325.
- 39) Sakamoto, T. (2017) Desire and Violence in Modern Sport. *International Journal of Sport and Health Science*, 15, 85.
- 40) このような模倣的な関係性における〈らしさ〉の獲得=形成を巡る議論については, 体育教師らしさと体罰文化を論じた以下を参照されたい. 坂本拓弥 (2013) 505-521.
- 41) 久保正秋 (2010) p.262.
- 42) ジラールの欲望論の方法論的意義については, 以下を参照されたい. Sakamoto, T. (2017) 81-86. ; 坂本拓弥 (2017) ドーピング問題の欲望論的考察: わが国のアンチ・ドーピング教育の充実に向けて. *体育・スポーツ哲学研究*, 39 (2), 121-136.
- 43) Sakamoto は欲望のこの模倣的な特徴について, 兄の持っているものであれば, それが自分の年齢や能力に見合ったものでなくとも, とにかく欲しがる弟の例を挙げている. Sakamoto, T. (2017) 83.
- 44) ジラール, R. (古田幸男訳) (1971) 欲望の現象学: ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実. 法政大学出版局. p.2.
- 45) ジラールはそれを「敵対関係」と呼んでいる. 同上書. p.7.
- 46) 同上書. p.94.
- 47) 坂本拓弥 (2017) 135.
- 48) ジラール (1971) p.117.
- 49) 同上書. p.3.
- 50) 同上書. p.59.
- 51) 久保正秋 (2010) p.262.
- 52) 坂本拓弥 (2017) 129.
- 53) このようないわゆる愛のムチといわれるような事象は, これまで無数に報告されている. ここでは, 最近の一例を挙げるにとどめたい. 或る高等学校の女子バレーボール部の監督は, 部員への暴力や暴言に対する処分を受けて, 「うまくなって欲しいという思いが強すぎた」と述べている. これはまさに, 指導者の〈勝ちたい〉という欲望が, 当の指導者自身には自覚されていないことを示すものであろう. 朝日新聞 2018年9月13日夕刊, p.10.

(2018年度座長推薦論文)

受付 2018年9月26日  
受理 2018年10月19日